

167 鳴外の於母影

一〇一〇の新しく発見された文章が、鷗外に新たに生き生きとしたイメージを付けて加えています。彼の人生それ自体が、鷗外の最も偉大な作品であり、それは彼が普段より練り上げたオートバイシヨン(虚構的自伝)なのです。「鷗外歴史」とは「誰ぞ」と不思議に思つててしまう。しかし、どうが鷗外の幽靈で、どうか

たに発見されて増える傾向にあります。ヘルムリッヒの新聞等の内容を纏めて紹介するコラム『横島通信』などでは、初めて電灯照明が取り付けられたこのカフェで、人々は深夜まで、およそ六〇〇枚の外國語新聞を読みふけたり、手紙を書くことができました。当時の経験は、かかれています。また、騒音自身の翻訳や文学その他のテキストなどを伝播するため、メディアを上手く活用していましたようです。新劇だけにおける道標的な作品『Einsame Menschen』も、例えば読売新聞の紙面で六七回にわたり連載されたものでした。『騒音と新聞』というテーマは、まだ充分には研究されていない領域です。デジタル・メディアのおかげで、騒音に関する新たな文革が次々に見つかっています。読売新聞のデジタル・データベース上には、例えは騒音の投書は目下十六点あるのみですが、騒音の投書数は新聞に比べて増える傾向にあります。

小倉時代に書かれた書簡、新聞記事などの文章をまとめた「一バタツ版」は、鷗外の一昧異なる側面を広く紹介する絶好の機会になるでしょう。文豪鷗外は、筆まな、そして、投書家、コラムニスト、また新聞記者としての鷗外なしには考へられないのです。小倉時代のいれらの文章は、鷗外の生涯にわたる語彙メイアイとの闘争をひも解くためのパズルのように思えて仕事です。個々の新聞記者とともに闘うて初めて自身の言葉を世に出すことになりました。熱心に新聞を読むのはベル学道は、ドバイ渡航以前に譲完新聞に投書をしたところから始まりますが、これをきっかけでからめ渡つてからめ変わらず、いわば「カフエ・バウエル」に通い、ウイーンのカリエ・ハウスとも比肩されるような巨大なホールの一角に腰をかけていたようすで

關外の於母も影げ

1

169 鳴外の於母影

トライツ人として鳴外と小倉について考へるとき、ゲー全集のレクタム文庫本を外集のボックスに入れていた鳴外の姿が見えます。それが私の、小倉時代の

マンの才能が文學界で輝き始めるのは、鳴外の日本帰國後のことでした。彼らは同時帶にこの展覽会公園／パーカに居合わせたよつです(しかし、ハップトに集中的に取り組んだのもまた、小倉においてでした。) (日記、書簡によると、両曲にておそれへはすれ違つたであるアハルト・ハウプトマムの伝記と、その戯曲になされていています。鳴外と同年であり、夕暮れのベルリンの展覽会公園／パーカの「戦論」の翻訳も開始され、その他哲学・美学に関する翻訳の数々がこの時期として出版されるクニッケの「人間交際術」を底本にした翻案や、クラウゼヴィッツの時代でもあります。『独逸日記』の改訂にはじまり、後に『知恵袋』「心頭語』これた時代でもあります。この表向には中断と思われる時期は、しかし、鳴外のトライツ精神文化への濃密な取り組みが広い意味において映写され、優れた作品群が生まれておりますが、鳴外の小倉時代もまた、展示の中で特別な位置づけにあります。これでありますか、鳴外の母校であるベルリン大学の重點はもちろん鳴外のベルリン講堂に当たらつたかのようにも思えます。常設展の重點はもちらん鳴外のベルリン講堂にあります。

理念「自分自身を育成し、自分のあり方で以て他人に働きかけよつ」の遂行である

返つてみれば、私たちが敬意の念を抱く、鳴外の生涯の功績は、フンボルト的教育ルリニ大学を捉えた彼の視点に焦点を当て紹介することを主眼にしました。振りべき、特に、日本におけるトライツ文化の紹介、そして自由な学術活動の理想としてべき、これまでの影響に迫るものです。私たちとは、鳴外が多彩な領域で示した八面六臂の働き、そして異文化に触れるこことで豊かになる思想が、人のアイデンティティ形成の母校であるベルリン大学の役割に始まり、鳴外を模範例としながら、留学のつつ来訪客を、時間の旅へ誘いたいと願つております。この旅は、明治期のエリートの常設展示を新設する運びとなりました。この展示をもつて、多様な文化背景をもつた主要著作と生涯にわたる功績をもつて総合的に紹介しようと試みていくつもりであります。いっしだ考えを背景に、一〇一六年から一七年にかけてベルリン森鷗外記念館

が、今日の読者にとって、文字通りの「もはや草」となることを願っております。その難解な言葉と文体のために近寄り難い鳴外ですが、この「一パン」版全ての読者が、そして全ての世代がそれをのぞんで見つけなければならないのです。ながらが鳴外の魂であるのか、省察する者もいるでしょう。最終的な答えはあります。

168

(ベルリン森鷗外記念館ギュレーテー)

鳥外は懇願にあたり、ベルリンの美術館・博物館を思い浮かべていたのかもしれません。ジエイムズ・ジモゾーの芸術事業支援なくして、世界文化遺産でもあるベルリンの博物館島は存在しなかったのですから。一一〇一七年十月に北橋健治市長と、博物館島にある新博物館と旧国立美術館を訪問した時のことを思い出します。後者は、鳥外もよく知り、上田敏にも薦めた芸術のスポーツですが、その場に立った瞬間、ベルリンと小倉を結ぶ、時間と国家の境界を全て越えてゆくよしします。

な不思議な縁を感じ取りました。

金調達者として活動したのだと思なすとしてもできでしょ。私たちには、資金援助を呼びかけるカードに上記の鳥外の文を載せて配布し、常設展新設というプロジェクトを、北九州の皆様のご協力もあって、遂行することができたのです。

一二〇一年、常設展新設のための資金が不足していた折には、新聞記事『我々が懇願した鳥外のことを思わずにはいられませんでした。鳥外は当時、日本初の資

州で行いました文学関連の催し物も、記憶すべきもの一つです。これが森鷗外記念館三周年記念式典の際にもまた、ご来賓としてお見え頂けたことがあります。森まゆみ氏、平出隆氏、平野啓一郎氏、伊藤比呂美氏と共に北九州記念会の代表の方々の定期的な訪問により引き継がれ、そして一二〇四年のベルリントン・ボルト大学所属の森鷗外記念館にとって、北九州との交流はともに意義深いものです。交流は、すでにベルリンの壁の崩壊以前、北九州からの旅行も意識深いものです。

鳥外像です。それは、翻訳にまつわる生産的活動の傍ら、例えばゲーテの「ファウスト」の上巻翻訳のように、後になってようやく形となるプロジェクトの数々を対話によって整えられる基礎となるものや、いいで樂いたのです。外套のポケットで揺籃させた人物の姿です。内面との対話、もしくは他者との対話による翻訳のように、後になつてようやく形となるプロジェクトの数々を